

話し言葉フランス語の *parce que* の対比的用法について

秋廣 尚恵

1. はじめに

現代フランス語の *parce que* は、論理的な因果関係を表す従属接続詞として機能するだけではなく、談話的コネクターとして、先行する発話を正当化する発話行為を導入したり、あるいは、談話を構成する単位間の結びつきを担い、テキストの凝結性の構築に寄与したりする機能を果たしている。

このことは、*Approche Promominale*¹（代名詞的アプローチ）に基づく Debaisieux (1994, 2004, 2006, 2013)、論証的発話行為理論に基づく Ducrot (1983)、及び Groupe λ-I (1975)、関連性理論に基づく Moeschler (1986, 1987, 2003, 2009)などでも、既に明らかにされてきた。また、認知言語学的な文法化理論の観点から見ると、客観的な事態の因果関係を表す用法から、主観的用法、さらには間主観的用法へと文法化を遂げ、徐々に *car* を駆逐しつつ、*parce que* が用法を拡大してきたという経緯については、Degand & Fagard (2008) の通時的研究により詳しく述べられている。

これらの先行研究を踏まえ、秋廣(2016)では、Debaisieux (2013) 同様、*Approche Pronominale*（代名詞的アプローチ）の枠組みを援用しつつ、他の理由を表す接続詞 *car* や *puisque* と比較しつつ、現代フランス語のインフォーマルな話し言葉コーパスにおける *parce que* の用法の共時的な記述研究を行った。Akihiro (2018) では、さらに、*parce que* の多義性についてコーパス駆動的な記述研究を行ってきた。

Akihiro (2018 : 5.2.3 節)において、これまでの先行研究の中で言及されることのなかった対比的なコンテクストに現われる *parce que* の用法がコーパス中に少数ではあるが存在することについて指摘をした。しかしながら、紙面の都合上、このような *parce que* の例に関しての詳しい記述や、狭義、広義の意味での因果関係を表す用法との関連性などについては論じることが出来なかった。したがって、本稿では、もっぱら、この対比的用法に焦点を当てた考察を進めたいと考える。

Parce que の対比的用法は規範的な書き言葉には全く見られないものである。また、話し言葉コーパスの調査であってもごく少数例が散見された程度である。だが、実際の日常会話の中では、頻繁に耳にする例であり、ごく当たり前の自然な表現として、フランス人話者の間で定着している用法である。したがって、この用法は、例外的な例として処理されるべきではなく、むしろ、他の用法と共に体系的に記述されるべきである。

本稿では、先に述べたように、統語論レベルの分析にあたっては、*Approche Pronominale* を援用するが、接続表現のもつ意味分類については、統語的分析を主とするこの方法論はあまり

¹ *Approche Pronominale*（以下 AP）とは、Blanche-Benveniste et al. (1984) によって提唱された、話し言葉の統語分析を行うための method 論である。Blanche-Benveniste (1990 : 13) でも指摘されているように、この方法論は演繹的な言語理論の構築を目指すのではなく、話し言葉コーパスの記述に基づき、経験的に引き出された応用可能な原則を提示する方法論である。結合価により分析できる文法的依存関係を扱うミクロ統語論のレベルと、談話の最小構成要素である「発話」の間の依存関係を扱うマクロ統語論のレベルの 2 層構造を総合的に分析する。

参考にはならないため、その欠如を補うために、「対比」の接続表現の意味関係をミクロ統語レベル、マクロ統語レベルの双方において、網羅的に研究した Rudolph (1996)も合わせて参考にする。

2. コーパスについて

本稿の調査で使用したコーパスは、東京外国語大学 Global COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点（2006 年~2012 年）」の枠組みにおいて、2011 年、エックス・マルセイユ大学において行った録音調査のデータである。データの概要としては、お互いによく知り合った仲のフランス人学生同士の自由会話 20 件、規模としては、およそ 200 万語数である。各会話は約 1 時間程度。調査者の介入は全くなかった。会話の参加者は、自由にテーマを選んで会話をする。収録された音声データは、以下の転写規則にしたがって音声書き起こし作業を行い、その校正はプロジェクトのフランス語学専門のスタッフによって行われた。以下の表 1 にコーパスの転写規則を付す。

【表 1：コーパス転写規則】

記号	説明	例
#	ポーズ。長いものは# # #	bon c'est un # comment dirais-je
[...]	非言語的要素（笑い、咳払いなど）	[rire]
<...>	異なる発話者が同時に発話している部分	<voilà>
xxx	聞きとりが困難であった部分	je suis xxx.
...(.)	最後まで発話されず途中で切れてしまった語	mer(.)
(...)	発音されなかった部分の表示	t(u) as
Vv	母音が長く続いたらその母音を重ねる	boon

用例の調査にあたっては、Antconc²を使用し、parce que の用例をコンテクストと共に抽出して、一つ一つ用例を吟味した。また、文字情報だけでは統語的分析が曖昧なケースについては、コーパスの音声データを聞いて分析が正しいかどうかを確かめる作業を行った。このようにして集めた parce que の全用例数は 1363 件³である。これらの用例全体を対象とする用法分類に関しては、Akihiro(2018)を参照して頂きたい。

今回取り上げる「対比」の用法が現れたのはこれらの用例数のうちわずか 14 件のみであった。割合としては、全用例の 1% 程度なので、ごく少数例といってよい。しかしながら、その割合が低かった理由として、コーパスの数的、かつ状況的な限界がある点を考慮するべきである。ネイティブスピーカー 4 名⁴に尋ねてみたところ、コーパス中に実際に見つかった対比的用法は、書き言葉では使われないが、話し言葉においては、よく使われる例であるという回答を全員から得た。より大規模で、多様な状況で収集したデータを集めたコーパスにおいては、より多くの例が観察されることが十分に予想される。

² コンコーダンス作成フリーソフトウェア。以下のサイトから入手が可能。

<http://www.laurenceanthony.net/software.html>

³ Parce que の出現総数は 1484 例であるが、繰り返しや、言い直しや、言いかけて別な接続詞を選択した場合、あるいは、転写の揺れがある場合などを除き、実際に分析可能なものの数えると 1363 例となった。

⁴ フランス人学生 2 名（20 代女性）、フランス人研究者 1 名（70 代男性）、フランス人の図書館員（50 代女性）。

3. 対比的コンテクストに現われる **parce que** の例

Parce que はそもそも因果関係とその拡大的用法⁵に特化して用いられる接続表現であるが、以下の例にみるように、対比的な意味効果を持つコンテクストに現れることが可能である。

- 1) (本気で日本語を勉強し始める前は表面的な興味しかなかった。)

et donc en fait euh c'est c'est là qu'(e) j'ai commencé à réellement euh approcher euh commencer l'approche euh du du japonais du Japon pa(r)ce qu'avant c'(é)tait euh c'était superficiel

(110912AIX06)

前後の文脈を補って説明を加えておくと、例 1 では、話者は日本語や日本文化（日本の歴史や言語）を本気になって学び始めた時期について述べているが、以前は、日本に対して表面的な関心（アニメや J ポップなど）しかなかったという対比的な事態を述べている。

また、同様な例として、以下の例を挙げることができる。

- 2) (ペットのモルモットに手を噛まれた SI はあやうく指を失いかけたときのことを CPC に話している。SI を手術した医師は、その危険性の全て (tout ça) を手術中には言わなかつた。)

SI - tu vois tout ça i(l) m(e) l'a dit à la fin

CPC - ouais

SI - à la fin d(e) l'opération pa(r)ce que pendant l'opération il (n') arrêtait pas d(e) dire ouais quelle idée d'avoir des rats

(110914IX20)

例 2 は、SI がペットのモルモットに手を噛まれたとき、最初に診断を受けた医師の判断が誤っていたために治療が遅れ、あやうく手を切断される目にあったことを CPC に話している会話である。セカンドオピニオンを与えてくれた医師が直ちに SI を手術してくれて助かったわけだが、その手術をした医師が「誤診がいかに危険な結果をもたらすことになっていたか」を説明してくれたのは手術の最後になってからのことであった。手術中には「ネズミ (=ここではモルモットのことを述べている) を飼うなんてなんて（愚かな）考えなんだ！」と全く別なことを医師は言い続けていたと SI は述懐する。

本稿では、以上の例のように、**parce que** の前後に現れる要素の間に意味的対照性が観察されるものを全て分析の対象とする。意味的対照性をどのように定義するかという点をめぐっては、これまで様々な議論 (Lakoff 1971, Anscombe et Ducrot 1977) があるように、単に形式意味論的な論理関係の対立にはとどまらず、発話者の意図、コンテクスト、前提、談話の流れなど様々な点を考慮しなくてはならない深い問題である。

本稿では、「対比」を、論理的意味だけではなく、コンテクストや語用論的解釈を含む、より幅広い意味を持つ接続関係の一つとして定義する。**Parce que** の前件と後件を比較すべき点が明示的、あるいは含意的にコンテクストの中に現われており、その点において、異なる事態を比べて表現しているものをすべて「対比」とみなす。以上に挙げた例 1 では、「日本語の学習」という点において、「学習開始時点」(前件) と「それ以前」(後件) の状態を比べており、また、例 2 では、「医師の説明」という点において、「手術中」(前件) と「手術後」(後件) の内容を比べている。

4. **Parce que** の対比的用法のタイプの分類

既に Akihiro (2018) でも指摘したように、対比的用法に限らず、一般に、S1 **parce que** S2 (S1 は前件、S2 は後件を表す) の構文は、どのようなステータス (例えば、従属節、独立節をなす

⁵ 因果関係の拡大的用法については、Moeschler (1986, 1987, 2003, 2009) の一連の研究を参照のこと。

発話、ないしは発話行為⁶、さらには、言語化されない談話的記憶や語用論的知識といったステータス)を持つ S1、S2 を *parce que* が結び付けているのかということによって、いくつかの用法のタイプに分類することができる。すなわち、①従属節 S2 を主節 S1 に統合させるタイプ、②2 つの独立節 S1、S2 を等位的に結びつけるタイプ、③S1 が言語化されず、談話的記憶や発話状況から語用論的推論により解釈されるタイプ、さらには、④S2 が言語化されないタイプ（口ごもる、あえて口に出さない、あるいは相手に語用論的に類推させる）が存在する⁷と考えられる。以下に例を挙げつつそれぞれのタイプを説明しよう。

① 従属節 S2 を主節 S1 に統合させるタイプ

ils sont allés manger *parce qu'* ils avaient faim

このタイプは、いわゆる伝統文法でいうところの接続詞としての *parce que* の用法で、主節に統合される従属節を結び付けるタイプである。

② 2 つの独立節 S1、S2 を等位的に結びつけるタイプ

qu'est-ce qu'on fait # *parce qu'* il est midi

ここで、*parce que* が結び付けているのは、*qu'est-ce qu'on fait* という「疑問」の発話内効力的モダリティを有する「発話行為」と *il est midi* という「断定」の発話内効力的モダリティを有する「発話行為」である（「何しようか。」というのも、昼だからね。）。

③ S1 と S2 は談話を構成する単位で、その関係が単純に因果関係によっては説明できないタイプ

（L1 と L2 は同じ職場の同僚。L3 は日本から来た友人。L1 と L2 はもうすぐ退職なので、退職したら日本に L3 に会いに行きたいと考えている。S1 は語用論的推論により「もうすぐ退職である *c'est bientôt la retraite*」と解釈される。）

L1 : quand on sera à la retraite on ira voir à/ehu au Japon on ira le voir

L3 : <pas de problème hein voilà vous nous>

L1 : *parce que* toi toi tu (x) tu as soixante toi

L2 : eh oui

L1 : et moi j'ai soixante-deux et j'aurai soixante-trois cette année

L2 : mm, encore encore pour un an (050407AIX04)

④ S1 が独立節で、S2 が言語化されない（理由の言明を拒否、あるいは口ごもる）タイプ

pourquoi tu ne me l'as pas dit – parce que

以上を見て、直ちに、タイプ①とそれ以外のものが異なる分析レベルに属する問題であることが分かるだろう。タイプ①はミクロ統語論レベルで機能する *parce que* であり、形式的テスト (*c'est~que* により焦点化が可能かどうか、*pour ça* により代名詞化が可能かどうか、否定のス

⁶ 「発話行為」には、「発話を産出する行為」を指す意味で用いられる場合があるが、本稿ではその意味で「発話行為」を用いない。Austin 以降の言語行為論に見られるように、発話内効力 (force illocutoire) を有する単位を「発話行為 (acte de parole)」として定義する。Debaisieux(2013:65) に従い、本稿では、韻律的自立性、ミクロ統語論からの文法的自立性を持つ「発話」と、韻律的自立性、文法的自立性に加え、「発話内効力」を備え、手続き的意味、メタ言語的意味を有する「発話行為」とを区別して定義する。確かに、前者も後者も言語的産出行為の結果の一種であることには変わりがないが、モダリティの観点から見て、「発話行為」を「発話」とは別のステータスを持つ単位として区別した方が、話し言葉に現われる様々な *parce que* の用法の分析をする上では有効であると思われる。ちなみに「発話」の全てが必ずしも「発話内効力」を持つわけではない、という点では、Debaisieux (2013) だけではなく、Ducrot (1983)などでもすでに指摘がなされている。

⁷ Akihiro(2018)では、③と④を一つの分類としてとりまとめ、全体を 3 つのカテゴリーにまとめている。

コーパスに入るかどうか、他の *parce que* 節を等位させることができるかどうかなど) を用いることによって、主節に対する文法的依存性を確かめることができるが、タイプ②以降ではこうしたテストが適用できない。とりわけ、タイプ③は、S1 が何であるかを直ちに識別することが困難な例である。タイプ④は S2 が言語形式として文脈上現れないことによって識別される。

さて、コーパス中に対比的用法が観察されたのは、このうち、ミクロ統語論レベルのタイプ①、及び、マクロ統語論レベルのタイプの②、③であった。以下、それぞれのタイプについて具体的に用例を検討する。対比的な S1 と S2 を結び付ける *parce que* が単に対比的コンテクストに現れた因果性のマーカーであるのか、あるいは、因果性のマーカーとは別の対比的用法として定義することが可能かという点を吟味する。ちなみに、先に挙げた例 1 と例 2 はいずれも、②に属するタイプとして分類が可能である。以下、4 章において、それぞれのタイプの用例を詳しく記述する。

【表 2 : *parce que* の対比の用法とミクロ／マクロ統語論レベル】

ミクロ統語論	①従属節 S2 を主節 S1 に統合させる対比用法 (以下の 4.1.1.)
マクロ統語論	②独立節 S1、S2 を結び付ける対比用法 (以下の 4.2.1.)
	③S1 と S2 の関係が因果関係によっては説明できない対比用法(以下の 4.2.2.)

4.1. ミクロ統語論レベルの *parce que* が連結する対比関係

4.1.1. タイプ①「従属節 S2 を主節 S1 に統合させる対比的用法」

このタイプでは、S2 は S1 に統語的に依存する従属節である。S1 と S2 の間には、意味的対照性が存在するが、それは、必ずしも明示的に表現されているものではない。以下の例 3 や例 4⁸がその例である。

- 3) *après c'est moi qui suis allé le voir parce que sinon il est pas venu me le réclamer* (110915AIX27)
 4) *je l'ai fait pour Alain parce qu'il sait pas comment ça fonctionne* (110915AIX27)

また、これらの例の *parce que* を、典型的な対立的接続表現としての *mais* (しかし) に置き換えることは不可能である。

このタイプにおいては、S1 と S2 の事態の組み合わせが、意味的対照性を表しているように解釈ができるものの、それぞれの事態が対立するものとして連結されているわけではない。むしろ、S2 は S1 の事態が生じる直接的で必然的な「原因」や「理由」を表す従属的な副詞節をなしており、S1 の成立は S2 の成立を必然的に前提としなくてはならない。S1 に対する理由節としての S2 の意味的、かつ統語的な従属性は極めて強く、むしろ S1 と S2 の事態の表す意味の対比性はコンテクストから導き出された偶発的で弱いものであると言える。以上のことから、このタイプにおいては、この対比的用法を、因果関係を表す用法から取り立てて区別する必要はないと考える。

4.2. マクロ統語論レベルの対比関係

4.2.1. タイプ②独立節 S1、S2 を結び付ける *parce que* の対比的用法

先に挙げた例 1、例 2 も実はこのタイプ②にあたるのだが、コーパス中にはこうした例が最も多く、全部で 7 件の例が観察されている。いずれの例においても、S1 と S2 の間に意味的対

⁸ 「アランはそれがどうなっているのかわからない」という S2 の意味内容には「アランはそれができない」という意味が含意されていると考えることができる。従って、「私がやってあげた」という S1 の意味内容に対比的な事態を S2 が結び付けていると考えることができる。

照性が明確に観察される。先の①のタイプと異なり、S1 と S2 はそれぞれ独立した発話としてのステータスを有しているためであると考えられる。

すでに、Debaïsieux (2013) でも指摘されているように、こうした独立節を導く *parce que* は、主観的判断に対する根拠を示したり、自らの発話行為を正当化したりといった様々な発話内効力を表すモダリティを有している。*Parce que* の対比的用法も、他の *parce que* の用法と同様にこうしたモダリティを表現するマーカーとして機能している。以下の例を見よう。

5) (日本製のビデオゲームについて様々な利点を話している文脈で)

MNY - j(e) veux dire en général c'est c'est plutôt euh des jeux qu'on attendra [aspiration brève] qu'on attendrait du côté américain et là encore c'est c'est

OL - oui, i(ls) sont

MNY - c'est japonais

OL - oui ça me surprise ça peut surprendre euh *pa(r)ce que* euh les Américains i(ls ne) font que des des voilà des gros jeux euh maintenant le le la l'argent qui passe dans un jeu c'est plus que dans un film euh quand on regarde les derniers jeux qui sont sortis par exempl(e) j(e ne) sais pas j(e) pense les derniers gros jeux comme euh GTA IV euh tous les (x), des trucs comme ça i(ls) passent vraiment un argent monstre dedans et c'est l(e) genre de jeu on aime b(ien) on y joue et une fois qu'on a fini l(e) jeu après on fait encore quelques trucs et après on s'en lasse

(110914AIX20)

文脈を補って説明すると、この会話で、OL は日本製のビデオゲームは小さな予算でも丁寧に作成されており、ストーリー性も高く、遊んでいてなかなか飽きないと述べている。MNY も、そのことはアメリカ製のゲームに期待したいところだが、やはり日本製のゲームの方が優れていると同意する。OL は「驚くべきだ」と述べる (S1)。そして、その発言に続く *parce que* で日本製ゲームとは対比的な「アメリカ製ビデオゲームの特徴（アメリカ製のビデオゲームは大きな予算で壮大なゲームを作成するので、最初は心を奪われるのだがすぐに飽きてしまう）」についての一連の説明を導入する (S2)。ここでは、アメリカのゲームの特徴を挙げることで、日本のゲームへの評価を述べた発言ないしは、評価の判断に対する根拠づけを行っていると考えられる。S1、S2 はいずれも独立した 2 つの発話行為をなし、いずれも「断定」の発話内効力的モダリティを有していると考えられる。

ちなみに、こうした対比的用法では、S2 に左方遊離を伴う発話が続く例が多い。例えば、先に挙げた例 5 (les Américains, ils...) も、その一つであるが、他にも、以下のようない例 (pour nous, c'était...) も見られた。左方遊離は、遊離した要素をコンテクスト中に現われる別な要素と対比させるためによく用いられる構文である。例 5 の les Américains は、les japonais と、また、以下の例 6 の pour nous は、共発話者の tu と対比されていると考えられる。

6) HW335-(pu)tain moi j(e) m'en rappelle (pu)tain d(e) mes années d(e) lycée ça a été les pires années d(e) ma vie j(e) me rappelle et tout tout l(e) monde était là ouais et tout le lycée tu vas voir ça va être euh génial et tout ça s(e)ra les meilleures années d(e) ta vie tu t'en rappelleras tout l(e) temps [aspiration brève] [bruit métallique] j(e) vais rester polie je n(e) dirai rien mais, je n'en pense pas moins [en riant] ce que euh c'était loin d'être le cas

VL336-ben tu es mal tombée *pa(r)ce que* pour nous, c'était vraiment les meilleures années d(e) nos vies!

(110913AIX12)

例 6 では、「高校時代は人生で一番楽しいと人には言われているが、ちっとも楽しくなかった」

と述べる HW に対し、VL は「あなたは運が悪かった」(S1) と述べる。そしてその発話行為を「私たちにとっては本当に人生で最高の年月だったのだ」(S2) と対照的な事態を述べることによって、正当化していると考えることができる。ここでは、S1、S2 は「断定」のモダリティを有する独立した発話行為をなしている。

以上に見るよう、タイプ②は、いずれも、S1 で表した自らの発話行為や主観的判断に対する正当化、根拠づけをするために S1 とは対比的な論拠を示す S2 を発話しているものである。したがって、S1 と S2 の間には確かに意味的対照性はあるものの、依然として因果関係の拡大用法の一つとして考えることが可能である。実際、これらの例においても、*parce que* を *mais* に言い換えることには、違和感があるとインフォーマントは回答している。したがって、こうした *parce que* の例についても、対比的な接続用法があるというよりは、偶發的に対比的なコンテクストとして現れているだけであるというべきものであり、特にその用法を因果関係の拡大用法から区別する必要はないと考えられる。

4.2.2. タイプ③S1 と S2 の関係が単純に因果関係によっては説明できないタイプ

このタイプでは、S1 が言語形式として明確に輪郭をもつて存在しない点に特徴がある。例 7 を見てみよう。これは、BC と DC が日本旅行に一緒に行く計画を立てている会話から抜粋されたものである。この中で、BC は DC に「エックス市のミラボー通りにある外貨両替専門店に日本円に換金に行こう」と提案する。すると DC は、その提案 S1 を受け、*parce que* を用いて「私なら銀行に行く」という代替案 S2 を導入している。

- 7) (BC と DC は日本に旅行に行くので、ユーロを日本円に換金しなくてはならない。)

BC - ouais ah oui (il) faudra que j(e) fasse de la monnaie aussi ben on ira au à Aix là sur le cours Mirabeau (il) y a (il) y a un ### j(e ne) sais pas comment on appelle ça moi j'appelle ça un change (en)fin un magasin de change

DC - pour changer la monnaie

BC - ouais

DC - ouais.

BC - et puis en plus j'ai des francs suisses à faire changer parce que euh j'en ai j'en ai gardé du coup

DC - *parce que* moi sinon j(e) passe euh par euh ma banque en fait pour aller à Londres j'avais fait ça en fait j'avais euh j'avais commandé euh j(e ne) sais plus combien de euh livres et euh i(ls) m(e) les avaient données assez rapidement

BC - ah d'accord

DC - j'avais changé comme ça en fait (110914AIX17, Akihiro 2018)

興味深いことに、この例の *parce que* は *mais* に言い換えることが可能である。また、*parce que* を削除して S2 をいきなり切り出したとしても、論理的意味に齟齬は生じないし、文法的に非文になるわけでもない。こうしたことから、この例の *parce que* は、因果関係の接続詞というよりはむしろ、先行文脈に関係づけつつ、新たな発話行為を談話に導入する談話標識としての機能していることが分かる。

ただし、*parce que* なしで DC がそのまま発話を切り出した場合、あるいは *parce que* の代わりに *mais* を用いて切り出した場合には、対立的事態を単にそのまま記述している印象を受けるのに対し、例 7 のように *parce que* を使用した場合には、相手の話を理解した上で、それと

は別な提案を行うものとして解釈されると 3 名のインフォーマント⁹が指摘している。

こうしたニュアンスの違いは、この用法が因果関係の拡大用法の一種であることに起因していると考えられる。つまり、ここで *parce que* は「あなたに別な提案をする」という S2 の発話行為そのものを、妥当な発話行為として正当化しつつ、談話内に導入している。コーパス中には、このような代替意見の提案の例は 3 例見つかっているが、実際の発話の中では、頻繁にこうした例を耳にする。会話のストラテジーの一つとして、あるいは、よく用いられる言い回しとして、かなり定着した用法になっていると考えられる。

つぎに、タイプ③の属する別な例を引用したい。

- 8) (FM はインターネットで航空券を探したときのことを GA に話している。)

FM596 – j'ai regardé des vols mais ceux qui arrivent le plus tôt c'est midi et demi dans ceux que j'ai trouvé qui restent les moins chers quoi

GA606 – oui###

FM597 – *parce que* j'ai vu par contre que tu avais des vols jusqu'à 6000€ j(e n')ai pas compris pourquoi c'était la même chose en classe économique je me suis dit : « grosse arnaque »

GA607 – [rire] ouais voilà c'est ça

FM598 – Donc c'est pour ça que je pense qu'il vaut mieux qu'on achète à Air France directement.

Donc mon père, il a dit que quand on va payer, on lui dit. Vu qu'il (ne) passe pas loin de Marignane, il ira demander combien ils le vendent sur place. Parce que des fois, ils te font des rabais sur place, genre si ils vendent à 800 et il est à 1000.

(110915AIX27)

FM はインターネットで航空便を検索した結果を GA に話している。FM は「一番安い料金で残っている便の中で、最も早く到着するものは昼の 12 時半だった」という検索結果を述べた後、「逆に 6000 ヨーロもする便まであるのを見た」と述べている。この *parce que* が導く S2 は先行する発話 (S1) 「航空便を探したけど、一番安い便の中で残っていたもので、一番早く到着するのは、お昼の 12 時半着だ」に対する正当化を行っているわけでも根拠を示しているわけでもない。むしろ、「インターネットサイトには、安い便と並んで、同じエコノミークラスの便でも 6000 ヨーロもするものがある」という対比関係それ自体を指摘することによって、サイトへの不信感を表明し、エールフランスへ直接買いに行くことを提案しているのである。

インフォーマントによれば、この *parce que* を *mais* によって言い換えることは可能であるが、そうした場合には、解釈の違いが生じるという。*Mais* を用いた場合、格安便の話よりは、6000 ヨーロもする便の話に情報の重点が置かれ、安い便の話から高い便の話へと話題の転換がなされ、その後、新たな方向へと談話が展開していくことが予想される。しかしながら、先に述べたように、ここではそうした展開は見られない。

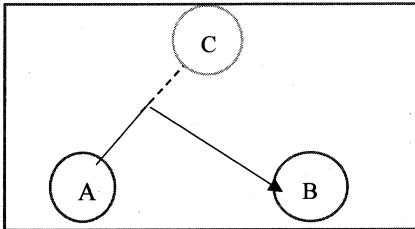
一方、*parce que* を用いた場合には、格安便の話の補足的説明として、それとは対比的な情報を付け足していると解釈される。インフォーマントによれば、この例の *parce que* については、対立的で新情報へ重点を置く *mais* で言い換えるよりも、むしろ、補足的に対比的事態を追加する機能を持つ *d'ailleurs* で言い換えた方がより近い意味を表すことができるという¹⁰。

- 9) *d'ailleurs* j'ai vu que tu avais des vols jusqu'à 6000€

⁹ いずれも 30 代前半で、一人は男性、もう 2 人は女性。フランス語教育の修士課程、あるいは博士課程を修了し、フランス語教歴を持つインフォーマント。

¹⁰ *mais* や *d'ailleurs* を用いるのであれば、冗長的な *par contre* は削除する方がよい。

【図 1 : connexion of but】



Rudolph (2005 : 245)では、対比を結び付ける等位接続詞 A but B のような対比接続の特徴を図 1 のように示している。談話の継続性は A から C へ流れていくが、A but B の関係においては、その継続性は断ち切られ、談話は別な方向へと展開していく。フランス語の *mais* を使用した場合にも、類似した効果が表れると思われる。本稿の例 7 や例 8 において *parce que* の代わりに *mais* を使用した場合には、先行文脈から継続する談話の流れからの方転換が表現される。しかし、*parce que* を使用した場合には対比を行いつつも談話の流れの継続性は担保されている。

コーパス中には、タイプ③に属する例は 5 例が観察された。このタイプにおいて、*parce que* は S2 を正当化しつつ談話の中に導入する談話標識としての機能を果たしている。そして、S2 の導入を行う際、S2 の発話行為の妥当性を解釈するために、それと対比関係にある先行文脈 S1 を総括的、かつ回帰的に参照し、それと関係づける。導入する発話 S2 の正当化と共に先行文脈 S1 との対比関係を表示することが、このタイプでは重要であることが分かる。

5. 結論にかえて

まず、指摘しておかなくてはならないことは、S1 と S2 の表す事態の意味的対照性と、それらを連結する *parce que* が表示する意味関係は、次元の異なる問題であり、区別して扱う必要があるということである。その点を踏まえつつ、以下に結果をまとめる。

ミクロ統語論レベルで機能するタイプ①においては、S1 と S2 が意味的対照性をはっきり明示しているケースは少なく、むしろ、コンテクストから得られる副次的解釈にすぎないと考えられる。S1、S2 の表す事態の意味の組み合わせがいかなるものであれ、*parce que* は S1 に統語的に従属し、直接的で客観的事態の理由節 S2 を導く従属接続詞として機能する。

マクロ統語論レベルで機能するタイプ②では、S1 と S2 はともに独立した発話、ないしは発話行為のステータスを持つ。S1 と S2 は独立節であるが故に、多様な意味内容を表す S1 と S2 の組み合わせが可能であり、したがって、①に比べてもはっきりとした意味的対照性を表す例が観察された。しかしながら、それらを結ぶ *parce que* は、つねに「正当化」「根拠づけ」などの拡大的因果性に由来する意味効果を持つ。

最後のタイプ③においても、*parce que* はマクロ統語論レベルで機能する。しかし、②とは異なり、談話の切片としての先行文脈 S1 を総括的、回帰的に参照しつつ、S2 を談話内に導入する談話標識として機能する。*Parce que* は S1 と S2 を対比しつつも S1 から S2 の分岐を表す *mais* の機能とは対照的に継続性を担保する。この特徴は、*parce que* という語彙に備わる因果関係の連結辞としての本質的な機能に根差していると考えられる。

ミクロ統語論レベルからマクロ統語論レベルへ、そして S1 と S2 の単位が節から発話、発話行為、談話の切片へとステータスが変わることにより S1 と S2 の意味的関係は多様化し、それを連結する *parce que* の機能も拡大していく。この機能拡大は、Traugott & Trousdale (2013 : 96-112)でも論じられている文法的拡大 (grammaticalization expansion) の現象を例証するものである。本稿では、現代フランス語のインフォーマルな話し言葉においては、「対比」という、論理意味的に「因果」とは真逆の意味関係にある要素間の連結にも *parce que* が現れる例を記述しつつ、このコンテクストの拡大が *parce que* の機能拡大にどのような影響を与えていたかを検証した。とりわけ、タイプ③の例 7 のような表現に *parce que* の機能拡大を見る事ができる。

る。その一方で、機能拡大にあっても、*parce que* は、完全に「対比」に特化したマーカーとはならず、その本質的機能を保持しつつ、対比的要素の連結を行っていることを明らかにした。

参考文献

- Akihiro, H. (2018). “ Parce que ”, Fiche grammaticale du projet FRACOV de l'université de Paris 3, <http://www.univ-paris3.fr/index-des-fiches-227311.kjsp?RH=1373703153287>
- Anscombe, J-C. & O. Ducrot (1977). Deux mais en français ? *Lingua*, 43, 1-35.
- Austin, J.L. (1967). *How to do things with words*. Oxford: Clarendon Press.
- Blanche-Benveniste, C., Deuloufue, J., Stéfanini et J., Eynde, K. (1984). *Pronom et Syntaxe. L'approche pronominale et son application à la langue française*. Paris : SELAF.
- Blanche-Benveniste, C. (1990). *Le français parlé, études grammaticales*, Paris : CNRS éditions.
- Debaisieux, J.-M. (1994). *Fonctionnement de parce que en français parlé*. Thèse de doctorat en sciences du langage. Université de Nancy 2.
- Debaisieux, J.-M. (2002). Le fonctionnement de *parce que* en français parlé : étude quantitative sur corpus. In C. Pusch et W. Raible (dir), *Romanistische Korpuslinguistik – Korpora und gesprochene Sprache, Romance Corpus Linguistics, Corpora and Spoken Language*, Gunter Narr Verlag Tübingen : 349-362.
- Debaisieux, J.-M. (2004). Les conjonctions de subordination : mots de grammaire ou mots de discours, le cas de *parce que*, *Revue de sémantique et pragmatique*, 15/16, 51-67.
- Debaisieux, J.-M. (2006). La distinction entre dépendance grammaticale et dépendance macrosyntaxique comme moyen de résoudre les paradoxes de la subordination. *Faits de Langue*, 28, 119-132.
- Debaisieux, J.-M. (éd.) (2013). *Analyses linguistiques sur corpus, subordination en français*. Paris : Lavoisier.
- Degand, L. et Fagard, B. (2008). (Inter) subjectification des connecteurs : le cas de car et *parce que*. *Revista de Estudos Linguísticos da Universidade do Porto*, 3, 119-136.
- Ducrot, O. (1983). Puisque : essai de description polyphonique, *Revue Romane* numéro spécial, 24, 166-185.
- Groupe λ-I. (1975). Car, *parce que*, puisque, *Revue Romane*, 10, 248-280.
- Lakoff, R. (1971). If's, and's and but's about conjunction. In Fillmore, C.J. & Langendoen, D.J. (eds.) *Studies in linguistic semantics*. New York: Holt, 114-149.
- Moeschler, J. (1986). Connecteurs pragmatiques, lois de discours et stratégies interprétatives : *parce que* et la justification interprétative. *Cahiers de Linguistique*, 7, 149-167.
- Moeschler, J. (1987). Trois emplois de *parce que* en conversation, *Cahiers de linguistique française*, 8, 97-110.
- Moeschler, J. (2003). L'expression de la causalité en français, *Cahiers de Linguistique française*, 25, 11-42.
- Moeschler, J. (2009). Causalité et argumentation : l'exemple de *parce que*. *Nouveaux Cahiers de linguistique française*, 29, 97-110.
- Moeschler, J. (2011). Causalité, chaînes causales et argumentation. In Corminboef, G. et al. (eds.) *Du système linguistique aux actions langagières. Mélanges en l'honneur d'Alain Berrendonner*. Bruxelles : Duculot, 339-355.
- Rudolph, E. (1996). Contrast, adversative and concessive relations and their expressions in English, German, Spanish, Portuguese on sentence and text level, Berlin/New York, Walter de Gruyter.
- Traugott E.C. and Trousdale G. (2013), *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford: Oxford University Press.
- 秋廣尚恵 (2016) 「インフォーマルな会話における *parce que* の用法について」『フランス語学の最前線 5』東郷雄二・春木仁孝 (編) 小田涼他 (共著・担当 pp. 47-84) ひつじ書房